

【議事録】

藤沢市ミニシンポジウム

「住宅都市地域における持続可能なコミュニティの在り方の調査研究」報告会

次第

第1部 基調講演・調査報告

基調講演「持続あるコミュニティの構築について」

講師：大江 守之氏

(慶應義塾大学総合政策学部教授、藤沢市住宅都市地域コミュニティ調査委員会委員長)

調査報告「少子高齢社会における持続可能なコミュニティの形成について」

報告者：杉渕 武 (藤沢市企画政策部政策課 専任研究員)

第2部 パネルディスカッション

テーマ「住み慣れた地域での居場所の果たす役割」

○コーディネーター

大江 守之氏 (慶應義塾大学総合政策学部 教授)

○パネリスト

山野邊 國雄氏 (睦自治会シニアクラブ水睦会)

杉山 義子氏 (片瀬地区社会福祉協議会 会長)

青木 武彦 (藤沢市市民自治部市民自治推進課 課長補佐)

石田 大輔 (藤沢市市民自治部市民自治推進課 主任)

杉渕 武 (藤沢市企画政策部企画政策課 専任研究員)

○司会

ただいまから、藤沢市ミニシンポジウム「住宅都市地域における持続可能なコミュニティの在り方の調査研究」報告会を開催いたします。

本シンポジウムは、今年度一般財団法人地域活性化センターが実施されました「住宅都市地域における持続可能なコミュニティの在り方の調査研究支援事業」として、本市が採択を受けまして、調査事業を進めてきたものの結果報告の場として開催いたします。

本日は、調査研究に当たりご支援いただいております「地域活性化センター」から岩崎正敏常務理事にお越しいただいております。開会に当たりまして、お言葉をいただきたいと思っております。

○岩崎常務理事

地域活性化センターの岩崎です。地域活性化センターというのは、その名のとおりに、地域の活性化に取り組んでおられる組織や個人を三十数年にわたりご支援してきた組織でございます。今般は、神奈川県藤沢市と奈良県生駒市の2つの自治体に対し、「住宅都市地域における持続可能なコミュニティの在り方調査研究事業」に参画をしていただいて、費用面などでお手伝いをさせていただいているところでございます。

藤沢市は非常に恵まれた土地柄でございまして、人口もまだ増加しつつあり、東京、横浜にも通勤ができる。また、気候温暖で風光明媚で、日本の中でも非常に恵まれた土地柄であると、全国を見ていて思います。それでも長い目で見ますと、将来的にはその人口も恐らく減少していく。それに伴いまして、高齢者比率も上昇していき、生産年齢人口も減っていくことは、程度の差はあれ藤沢市もそういうことになるだろうという予測が立てられております。我々は従来、いわゆる地方の、もっと言えば過疎が進んでいるような地域に対するいろいろなお手伝いを一生懸命やってきたつもりであります。最近、このような恵まれた土地柄のところでも、これから長い目で見た場合に暮らしを支える形というものを考えていかないといけないだろうということに思い至りまして、先ほど申し上げましたような助成をさせていただくことにしたものでございます。

本日の主題であります「コミュニティ」というのは、一言で申し上げますと、私の主観ですが、「お世話様」とか「お互いさま」という言葉が通じる1つの単位であろうという気がいたします。それはこれから高齢者の方が安心して暮らせる、または子育て世代が希望を持って暮らせるための基盤の1つになるだろうと思っております。したがって、本日のシンポジウムで何か感じるものがあれば、ぜひ実際の行動に、考え方に取り入れていただければと思う次第でございます。

なお、先日、生駒市の方で藤沢市と生駒市の調査研究経過についての発表があったところでございます。本日、生駒市からわざわざおいででございますが、2時間にわたる長丁場ですけれども、皆様にとって実り多きものになりますように、祈念いたしまして、ごあいさついたします。よろしく願いいたします。

○司会

岩崎さま、ありがとうございました。

それでは、本日の日程をご説明いたします。第1部は基調講演及び調査報告となります。基調講演は、慶應義塾大学総合政策学部教授で、本調査研究における調査委員会で委員長を務めていただきました大江守之教授から、「持続あるコミュニティの構築について」をテーマにご講演をいただきます。そして、第1部の後半では、本市の企画政策課職員から本調査報告を予定しております。

第1部の後、10分間の休憩をはさみ、第2部はパネルディスカッションとなります。

それでは、第1部 基調講演・調査報告に入りたいと思います。はじめに、基調講演を大江教授よりお願いいたします。

○大江教授

皆さん、こんにちは。慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスにおります大江と申します。本日は、「持続可能なコミュニティの構築」ということで、お話をさせていただきます。

私は都市・住宅政策とその背景にあります人口・家族変動といった分野を専門に研究してきたのですが、「コミュニティ」という話を授業の中でするときに、この図式を使って説明します。これは標準的な教科書に出ているようなものですが、この横軸は閉じた、開いたという軸で、縦の方に結びつきがある、結びつきがないという軸になります。そうすると、最初に出てくるのが「地域共同体」と名前をつけたのですが、結びつきがあって、閉じているという農村コミュニティのようなものです。それが都市化するに従って、閉じているけれども、そのつながりがなくなってくるというふうに変化すると、それを「伝統的アノミー」と類型として書かれます。「アノミー」とは何かというと、「社会規範の動揺・弛緩・崩壊によって生じる欲求や行為の無規制状態」、ちょっと強い言葉ですが、都市化とともに旧来の伝統的な地域社会が崩れていく状態を指していると思います。

それがさらに進むと、結びつきがなくて開いた状態を「個我モデル」と言います。そういう状態になって、その次に開かれて、結びつきがあるという状態に移行すると言われていきます。こういう状態について、都市社会学の森岡先生が「コミュニティとは、地域社会における共同問題の最適な処理システムが形成され、それによって住民自治が最適に機能した状態を示す社会目標概念である」と言っているのですが、少し言い換えると、一定の地域に居住し、共同問題の最適な処理システムの形成を指向している居住者の集まりというものかと思っています。ここで重要なことは、コミュニティというのは結びつきがあって、開かれているというもので、それは必ずしも達成していないけれども、そこに向かおうとしているのが地域社会の姿だということです。

次の「出入り自由のコミュニティ」というのは、既に70年代ぐらいに示されていたもので、そういうものなのだろうなと考えていた人が多かったと思うのですが、最近読んだ「人間のいる場所」というのは、三浦展という社会学出身で、広く活躍されているのですが、

彼が見田宗介という社会学の著名な先生と対談したときに、見田先生が「やめたければいつでもやめられ、あまり束縛されない、そんな共同性が今、求められている。」と発言したというわけです。三浦さんは、「つながりたいが、縛られたくない」という共同性が大事だというふうに考えていたので、見田さんからそういう言葉を聞いてよかったということ、この「人間のいる場所」という本に書いたわけです。

それからもう1つ、読んで面白かった本に「日本の難点」という宮台真司という社会学者が、「幸福とはどういうことか」という書の中で、「かなり強い社会的排除を伴う旧来の家族や地域の包摂性と同様の社会的包摂機能を果たしつつ、かつての社会的排除機能の副作用の少ない、新たな相互扶助の関係性(新しい市民社会性)を構築し維持するしかない。」と書いているのですが、共通していることは、旧来の地域社会が持っていた強いつながりというものは、社会包摂機能を持っているけれども、同時にその強いつながりを持つためには、それ以外は排除するという側面がある。排除するという機能になるべく少なくても、包まれているという機能があるというところを目指していかなければいけないということで、わりと共通したことを皆さんが言っているという感じがします。

かつての共同体というのは、家族というものがあって、戸主がいて、地域・村社会の接点を担っていて、その周りに明治以降になると、近代社会がつくられていくわけですがけれども、こういう形にほぼなったのは1930年代、40年代で、子どもがとても多いという社会のときに、ほぼこういう状態だった。これは当時の農村社会学の著名な人が調べて、1930年代ぐらいの日本の農村を歩き回って、生産・消費・家事労働・娯楽・教育・ケアを担うイエという単位が強くと書いているわけです。

それが戦後になって、郊外化が始まると、強い家族がそのまま小さくなって、夫婦と子ども2人という小さな単位になった。それでも家族の中はしっかりと強いつながりがあって、その周りにいろいろな社会システムが出てくる。1つは経済的な発展とともに、その市場を通したいろいろな財やサービスが供給され、一方で、郊外自治体というのがいかに良いサービスを住民にするかということと競い合って、税金をより効果的に使うという行政サービスをつくらうとして、この部分が発展していったわけです。その分、地域社会が持っていた機能がだんだん縮小していくというふうに、家族と大きな社会というものが存在するような状態に移行していったのではないかと考えています。

それが21世紀の今現在起きている現象で、だんだんと家族が弱くなっていくという状態だと思う。一方で、強い専門システムの行政や市場が、家族の機能が弱まったところまで、カバーできるほど強くないということで、家族と強いシステムの間を埋める何らかの仕組みが必要になっていくというふうになっているのではなからうかというのが私の仮説です。それをとりあえず「弱い専門システム」と呼んでみたわけです。

私はもともと人口研究をメインにやっていて、いろいろなところで「人口減少社会とはどういう社会か」ということを聞かれると、「家族が大きく変わる社会である」と答えています。人口がどんどん減っていくから都市をコンパクトにしなければいけないとか、さま

ざまな言われ方があるけれども、一番大きなポイントは、家族の形が変わるということだと思います。私たちが持っている家族のモデルとかイメージは、戦後の夫婦と子ども2人という家族が大量に生まれた1960年代、70年代の状況でもって家族を見ているし、そういう小家族をつくったその親は、戦前にきょうだい数が非常に多い家族の中に生まれて、強い家族的なつながり、紐帯を持って育ったので、家族についての観念をそういうところに持っている。そして自分は小さな家族をつくっても強いつながりというものをそこに持っているということだと思えます。それが1960年代、70年代に生まれた子どもたちは結婚しないで、少子化が進むようになってきたというのが現在であります。

これは横浜郊外の戸建ての開発住宅地ですけれども、入ってきたときは夫婦と子ども2人という世界で、それが子どもが育っていったんだんいなくなって、最初に入ってきた人たちは高齢期に残るといって形になっていく。これが今まさに起きているわけです。

こういう状態になるときに、家族の支えを代替するだけでなく、地域社会に新たな信頼関係をつくり出すような仕組みが必要である。それは貨幣によって個別に購入するというだけでもないし、税金によって共同購入するだけでもない。「税金による共同購入」というのは耳慣れない言葉かもしれませんが、公園を買いだめといっても1人では買えないわけで、みんなで税金を払って公園を買うわけです。そして介護保険のシステムは税金と社会保険ですけれども、それは1人では買えないからそういう社会システムをつくって、恩恵を受けるというふうに、行政が行うことというのは、共同購入とか共同消費ということでもあるわけです。そのどちらでもない信頼に基づく相互サービスというものをつくり出す仕組みというのが「弱い専門システム」という中にあるのではないかと。それからその相互サービスの創出に新たな担い手が求められているというもので、それは誰かが一方的にやってくれるものではなくて、その恩恵を受ける人もそのサービスの出し手になるというタイプのものではないかと考えています。

これはその一つの例ですけれども、1人の人が何か欠落が生まれる。例えば配偶者と死別した高齢男性、年金収入はあるが、食事づくりは苦手、しかし買ったものを1人で食べても美味しくなく、そういう欠落を持っている人がいる。それでは食事を配食すればいいでしょうというふうに欠落を埋めるのではなくて、自分でその欠落を埋める。それはセルフヘルプですけれども、セルフヘルプは自分だけではできないので、仲間をつくってお互いに刺激し合って助け合ってやっていく。またそれを支える領域があって、それが「弱い専門システム」というものの1つの形ではないかと考えています。そこでさらに料理のスキルを得たら、そのスキルを自分のためだけに使うのではなくて、会食サービスに男性の料理を習ったグループが参加してサービスをするというサービスの担い手にもなっていくという形、それを回していくシステムというのが「弱い専門システム」と思っています。

こういう「弱い専門システム」というものを実際のものとして提示したものが、横浜市戸塚区の「ふらっとステーションドリーム」というコミュニティカフェであります。コーヒーとかランチを提供する「サロン」、それから「カレッジ」と呼んでいる健康維持を目的

とした講座の開設、情報相談センターということで住民のための情報収集と相談をすることで、それから趣味活動の支援ということで安い値段で壁を貸して、作品を飾らせてもらう。それからマイショップという小さなボックスを安い値段で借りて、自分のつくったものを展示して、欲しい人を買ってもらう、そういうようなことをやっている例です。この絵はどんなことをしているかいうのを説明するとき、アニメーションで動くのですけれども、Bさんという60代の男性で、定年退職を迎えたばかりということで暇をどう潰そうかと考えているところに、情報チームというところで活動しているCさんが誘うんです。そこで自分のスキルも生かせるということで、ホームページをつくる。そのCさんは、この会合が終わると、その同じ空間の中にあるところでお茶を飲んだり、ご飯を食べたりするわけです。つまりこのコミュニティカフェの担い手であると同時に、サービスの受け手にもなるわけです。そこで知り合ったDさんと釣りの趣味が合うということがわかって、意気投合して釣りに出かける関係の人ができたという人がいます。

それからEさんという70代のひとり暮らしの女性は、人に会いたい気分になったら、「ふらっと」へお茶を飲みに行く。そうしたら運営委員のFさんが、Eさんはお琴のお師匠さんだということを知っていて、ここでコンサートをやったらと誘うわけです。最初は悩んでいたけれども、やってみようかしらということでコンサートをしたところ、皆さんに聞いていただいてとてもありがたいということで、自分の居場所ができましたし、あいさつをする人が増えるということになりました。

次にGさんという60代の女性ですが、スタッフとして料理をつくっているのですが、料理づくりでもって、皆さんに楽しんでもらえるのがうれしいと思っている。そこで一緒にボランティアをしている人たちとの交流が楽しいと言っている方ですが、その人はたまたまお客で来た人と麻雀の話になって、「麻雀、いいわね」ということになって、運営委員会で麻雀をするのはどうだろうと話し合った結果、日曜日にその場所で数時間麻雀をすることを立ち上げたわけですが、今でも人気があって続いています。

今説明していた事例の特徴ですが、参加者は複数の活動に参加して、あるときはサービスの担い手となり、あるときは受け手となるというふうに、一方的にサービスされるわけではなく、誰かがサービスをしてくれるのを待っているわけでもない、そこに特徴がある。そして参加者間のネットワークというのは、コミュニティカフェの中でのネットワークと、そこから離れたネットワークと2つあるということで、1つは「面識縁」という顔見知りの関係ができていうこと、そして「選択縁」という、もう少し強い関係ができてくるというふうに、2つのつながりを生み出す役割をこのコミュニティカフェは果たしているということを、学生が1年以上ここに住んで研究しました。なぜここに住んだかというのと、分譲集合住宅に住んでいる人で、半分は倉庫に使っているのを、それを安く貸してあげるよという話になって、彼はここに住んで毎日のように出かけて、作業を観察していたという人ですけれども、そこから得られた知見というのは、こういう新しいつながりを生み出していくことができているということなのです。

今、いろいろな試みがあって、私も参加しているURが中心になっている「ルネッサンス in 洋光台」は、都市再生機構が開発し基盤整備をしたところに、賃貸住宅とか分譲も持っていますし、戸建ての分譲もしたところがあって、洋光台全体をこれからどうしていくかという中で、URが持っている空き店舗を「CCラボ」という名前にして、隈研吾建築事務所に安く内装作業施してくれて、ここを使って新しい地域資源、つまり人ですが、人と人とのつながり方、グループというものを掘り起こしていくということをやっている、いろいろな活動があるということがだんだんわかってきており、今、それをどういうふうにしたところで継続的にやっていくか、この場所を運営していくかがテーマになっています。こういう実験的な場所があると、いろいろな活動が出てくる。これまで全然知らなかったようなものが、「ああ、こういうものがあるんだ」ということがわかって、とてもこの実験が面白いと関係者は言っているところです。

まとめになります、「コミュニティ」というものは、先ほどお話したように「閉じてつながりがある」、「閉じてつながりがない」、「開いてつながりがない」、「開いてつながりがある」というように変化していくと言われているので、小さな地域の中にあるコミュニティというものは、一類型しかないというふうに考えがちですが、実際はそんなことはなくて、さまざまなタイプのコミュニティが重層的に地域の中にある。一人ひとりがいろいろなつながりの中にいるという状態にあると思うのです。

そういう重層性のなかで、「地縁型コミュニティ」という自治会・町内会に代表される組織もあって、そこで与えられる地位や役割関係の中で、ボランティアな活動や帰属感情を醸成するイベントなどが行われるというタイプがあるのです。

それから横浜市が1990年代に行った調査の中で発見されたと言われている「テーマ型コミュニティ」、今やそれは当たり前なので、いまさらという感じがするかもしれませんが、90年代前半に発見されたときには、結構、新しいものとして受け止められたわけです。それは趣味や関心を共有する人々の活動ベースに、共同的な解決を必要とするような問題に取り組むようなネットワーク、グループが持続する活動もあれば、プロジェクト的に一定の期間で終了するものもある。そういう場合でも終了しても一度形成されたネットワークは他の活動に生かされることも少なくないというものです。

一般に「地縁型」と「テーマ型」のコミュニティがあるとされてきたけれども、先ほどお話した「弱い専門システム」という領域を考えたときに、特に高齢期の家族内での相互的なサービスのやり取りがうまくいかないようになってきたときに、必ずしもそれが介護を必要とするという直接的な今の介護保険制度の対象になるという場合でなくても、何か支えが必要になるということが増えてくるわけです。もちろんテーマとしては、「子育て」でもいいし、「子どもの貧困」とか「子どもの食事」の問題でもいいし、「障がい者」の問題でもいいのです。いろいろな問題があるわけですが、そういうテーマを持った地域におけるつながり方の中で、持続的にテーマをしっかりと維持して取り組み続けるということが出てきたわけです。そういうものの代表としてNPOが介護保険サービス事業者に

なっているようなところが、単に介護サービスを提供するだけでなく、さまざまな地域のつながりをつくっていくことに貢献している例があるわけです。

最近聞いた例は、小規模多機能サービスというのを始めて、そのために既存の家屋を使ってやろうというときに、その周辺には新しい戸建てが幾つかできているのを見て、スタッフがその小規模多機能の場所でバーベキューパーティを開いて、周辺の新しく入ってきた会員の家族たちを招いて交流の場を持ったというのがあります。そのときに小規模多機能サービスの場所で認知症の高齢者もいるので、もしかしたら間違っただけで家に入ってきたりということもあり得るので、そのときはお知らせくださいねというふうにして、協力をお願いするというのをしたら、新しく入ってきた人たちの小学校に行っている子どもが、両親が働いて、たまたま家に誰もいないというときに、その小規模多機能のところに、安心した大人がいるところとして来てくれて、子育てに若干協力したりということもできて来ているという例もあります。高齢期に地域で暮らすことを支援するというミッションのもとで、それは達成しようと思っても地域の協力ができないし、地域の協力というのは、もしかしたらその中に積極的にそういうことをやりたいという人もいます。そういう人をうまく引き出していくという機能も、持続的なテーマをもったコミュニティは持っているわけです。

私が最初にお話した「出入り自由のコミュニティ」というのは、1つの地域社会の中で出入りが自由という意味は恐らくないのです。さまざまなつながりがある中で、出入りが自由なつながり方がそこに存在しているということが、自分が何かやりたいと、もう少し地域に貢献したいと思っても、例えば長い旅行にも行きたいとか、あるいは孫が遠くにいるからそこに会いに行きたいとか、自分の趣味のゴルフもしたいとか、いろいろなことをやりたい中で、ずっと地域の中で固定的な役割を負っていると、ちょっと辛いというときもあるわけです。そういうときに役割を担って、持続してやってくれるような組織とつながっていて、必要なときにそこに手伝いに行くことができるような出入りの自由さがこれから必要になっていく、広い意味でのケアというものを実際に支えていくということができるのではないかと思います。

最後に、今、介護保険制度が変わろうとしていて、総合事業、今まで地域支援事業と呼んでいた部分を拡充して、いろいろな形で要介護支援者だけでなく高齢者を含めて居場所をつくっていくことを進めようとしている。そこにはこれまでの非営利的な活動団体だけでなく、民間企業とかNPO、協同組合、社会福祉法人といろいろなところが関与していくというイメージを描いていって、これを実現しようと今、動いているわけです。それに伴ってお金も出てくるわけですが、そういうところに「ミッション型コミュニティ」というものが具体的にできていくというきっかけがあるのではないだろうかということで、これまでこういうコミュニティの問題は、縦割りだったり、行政の中では市民自治という所管ですが、実はその所管だけでなく、今の介護保険制度の中で動いているというものとかなり関係性があるって、地域の中ではいろいろな形で、実際にはつながりがあった

り、建物の利用などについても一緒にやったりという状況にあるので、そこをもう少し横のつながりを明確にしながら、連携してやっていくという形になっていくと、その中で私が「ミッション型コミュニティ」と呼んでいるようなタイプのものがもう少し出てくると、コミュニティの持続性がもう少し強くなるのではないかと考えているところです。

時間が参りましたので、コミュニティについて最近考えていることの基調講演を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

○司会

大江先生、ありがとうございました。

続きまして、藤沢市の調査研究報告について、企画政策課専門研究員の杉渕よりご報告いたします。

○企画政策課杉渕

皆さん、こんにちは。ただ今、大江先生から理論的なことと、大江先生がいろいろ経験されている実証的なお話がありましたが、その理論的なところを受けて、どういう調査をしたのかということをお話させていただきたいと思います。

これは藤沢市の位置・概要を示したものですので、省略いたします。

藤沢市では「市政運営の総合指針」というものを策定しておりますが、藤沢市でコミュニティの問題を考える上で、まずは藤沢市の特徴を押さえておく必要があると思ひまして記したものです。藤沢市の特徴は、バランスのとれた都市機能を有する都市ということあります。先ほど人口の問題が出ましたが、藤沢市では将来人口推計を示しております。これは少し前の推計ですので、今後は若干変わってくるかもしれません。総人口は2030年がピークで約43万人になります。高齢化率は、2025年に25.1%となります。

この推計は、今の人口が42万7,000人ですので、見直していく必要があるかと考えております。特に特徴的なのは「高齢者人口の推移」で、2015年から2025年にかけて65歳以上は約1.1倍ですが、75歳以上は約1.5倍となり非常に大きく増えてまいります。団塊の世代が増えるということが藤沢市の特徴になります。

藤沢市は、先ほど「バランスのとれた都市機能を持つ」と言いましたが、その中で13地区それぞれの地区の特性を生かしながら、まちづくりを進めてきたところでもあります。特に今回の調査対象地域としたのは、南部の片瀬地区と中部の湘南大庭地区です。

調査研究の背景と問題意識としては、先ほど藤沢市の特性を少しお話しましたが、特性を踏まえて地区のまちづくりを市民との協働で進めることが重要であるということです。また、少子高齢社会において2025年問題というものがあります。一般的に2025年問題は、団塊の世代が2025年頃までに後期高齢者となることで、介護・医療費など社会保障費の急増が懸念される問題とされております。しかし、社会保障費の増大だけではなく、地域社会の構造、産業構造、都市構造に大きな影響を与えられらるので、生き生きとした

暮らしを支える地域の担い手の減少をとめ、担い手を増やすためにはどのような手立てが必要だろうかということ、大きな問題意識として持っております。それと大規模な住宅地ということですが、住宅地域で市民の暮らしを支えてきた地域資産を今後の少子高齢社会でどのように有効に活用していくか。こういった問題意識のもとに今回の調査研究を始めたものであります。

調査の目的は、「超高齢化の進展」と「コミュニティの希薄化」による地域の課題を整理して、その手法について4つの視点、「場の視点」、「人の視点」、「参加しやすくするツールの視点」、「これらを含めたネットワークの視点」から検討して、持続可能なコミュニティの在り方を追求しようとしたものであります。特に「居場所」がキーワードになるかと思ひ、藤沢市内の「居場所」へ実地ヒアリング調査をいたしました。また、先進的な取組を行っている他自治体の「居場所」の視察も行いました。さらに、文献資料等の調査もいたしました。

調査対象地区として、湘南大庭地区と片瀬地区を選びました理由は、高齢化率が高く、また住宅地としての特殊性を持つということからです。ここで、2つの地区の特徴を紹介します。

湘南大庭地区の状況は、2015年からの15年間で75歳以上の高齢者数は2倍強で、65歳から74歳の高齢者数は約4割減少する推計をしております。要するに、75歳以上が増えるということです。高齢化率は、28.2%ということになります。湘南大庭地区の施設配置について説明します。公共施設とか小中学校等の配置状況になります。青丸印は、町内会館や集会場であります。湘南大庭地区は各町内会・自治会ごとに町内会館あるいは団地の集会所を設置しているのが特徴です。赤丸印は、実際に居場所のヒアリング調査に行ったところ です。

片瀬地区は、2040年までに人口が約4割減少する推計になっており、高齢化率は現在約27.5%です。湘南大庭地区と片瀬地区が藤沢市の中でも高いことがお分かりになると思ひます。片瀬地区は湘南大庭地区と違い、市立小中学校の数が地区で1校ずつであり、公共施設の数も少ないということがあります。赤丸印は、今回ヒアリング調査に行ったところ です。

課題の整理としては、両方とも共通するところがありますが、湘南大庭地区は特に多世代が住める住宅の必要性とか、集合住宅の中では高齢者は外出しにくいということがあります。また、町内会館、集会所がほぼ自治会・町内会ごとにあり、そこでの活動が非常に活発であります。それでも役員任期が1年という自治会・町内会が多く、継続した取組が困難であるというような課題が出ております。

片瀬地区でも自治会等の役員の成り手がいないということも出ておりますけれども、空き家が多く発生し、防犯・防災上問題があるという指摘があります。また、町内会館が少ないので、片瀬山地区は市民の家やしおさいセンターを利用したり、他地区の市民センターを利用しているというのが実態であります。そういう意味では集いの場が求められてい

るということでもあります。

実地ヒアリング調査といたしまして、先ほど申し上げた調査手法の4つの視点に基づき、「居場所」、「信頼」、「ツール」、「多様な機能」の調査をいたしました。居場所の役割については、先ほど大江先生から具体的な例を用いてご説明がありましたが、「気軽にいつでも立ち寄れる場所」というのが重要なキーワードではないかと調査を通じて感じました。自由に出入りができるということは、気軽にいつでも立ち寄れる場所というのと結びついていないのではないかと思います。

スライド「居場所の調査」は、湘南大庭地区と片瀬地区におけるヒアリング調査の概要をまとめたものでありますので、後でご覧いただきたいと思います。湘南大庭地区ではボランティアセンターの「ジョア」、小規模多機能型施設の「ぐるんとびー駒寄」、放課後児童育成クラブの「こいとっ子」等に調査に伺いました。また、地域の縁側事業を実施されている「交流スペースほっと舎」、湘南西部自治会の「見守りネット」、子どもたちの放課後の居場所であり、こちらも地域の縁側事業である「たきのさわパラダイス」を調査してきました。また、第2部のパネルディスカッションでお話をいただきます「睦自治会シニアクラブ」にも調査に行かせていただきました。

片瀬地区では、ボランティアセンターの「ひだまり片瀬」、「にこにこ広場」や地域の縁側事業の「コミュニティハウス片瀬山」に調査に伺いました。

スライドの21ページから28ページは、それぞれの活動場所の写真です。実際に行ってみると雰囲気や活動内容がわかると思います。湘南大庭地区では市民センター、ボランティアセンターの「ジョア」、放課後の居場所「こいとっ子」、それから地区の集会所や町内会館であります。それから地域の縁側事業の「ほっと舎」、小規模多機能型施設の「ぐるんとびー駒寄」です。片瀬地区では、ボランティアセンターの「ひだまり片瀬」、「にこにこ広場」です。これらは、空き店舗を借りて事業開始したものです。それから、地域の縁側事業を活用した「コミュニティハウス片瀬山」です。こちらは、多目的室や山本文庫があるというのが特徴であります。

居場所へのヒアリング調査を通じて、住民同士のつながりを構築するには、人々をつなぐキーパーソンの役割が大事ではないかということがわかってきました。

さらに、参加しやすくするツールの視点から、コミュニケーションロボットの活用というものも実験的に行いました。孤立しがちな高齢者が地域に出かけ、つきあいや交流を始めるきっかけになるツールとして何が可能かということをお調べさせていただきました。特にコミュニケーションロボットの場合は、お年寄りもそうですが、子どもたちが興味を示すということで、多世代交流のツールとするという可能性もあるのではないかと思います。使用したロボットは、富士ソフト株式会社が開発された「PALRO（パルロ）」です。スライド32ページは、たきのさわパラダイスで、「パルロ」を活用した時の写真です。

次に、これからこのような居場所をを作っていくのに、どういう考え方が必要かということをお話させていただきます。そこに居住し、働く人々がそれぞれに街とつき合うとい

う人間らしさを備えた街が求められているのではないか。そういう中でいろいろな使われ方ということで「ミクスドユース」ということが今後の鍵となるのではないかということをもとめております。

多様な機能の例として、東京都世田谷区では、「地域共生のいえ」という事業を行っており、空き室とか空き部屋、空き家を借りながら、いろいろな居場所を生み出しているという事例です。

それから多摩ニュータウンの永山団地では、団地の1階を使いながらいろいろ居場所を作っています。もともとは本屋であった高層団地の1階でスタートして、課題を自分たちで解決することが大事であるという認識のもとに、担い手同士をつなげていく様々な場所を作っているところです。

以上の調査から、「持続可能なコミュニティのため」ということで、大事な点があるのではないかということで6つを挙げております。多くの居場所に出てきたのが「顔と顔が見える関係をつくる」、「互いに話ができるきっかけをつくり、つながりを持つ」、「自分たちで課題を解決する気持ちを持つ」、「つながりをつくる橋渡し役（キーパーソン）がいる」です。また、それと同時に、その空間をつくるという意味で、「気軽に立ち寄れる居場所が大切な役割を持つ」、「多様な機能を持つ居場所を確保できる環境をつくる」です。こういった6つの要素が、今後の持続可能なコミュニティのためには大事ではないかということ調査研究の中で整理をしているところであります。

最後に、報告書の中では、地域での人のつながりを広げていくために、こういった施策につなげていくかという施策の方向性の考え方を示しております。大きく2つに分けて示しており、1つ目は、「持続可能なコミュニティ形成に向けて」ということでは6つを挙げております。「地域のつながりの構築」、「多世代が交流できる場の提供」、「新たなツールの活用」、「支え合いと助け合いを促進する人材の育成と発掘」、「地域における、住、働、学、健康・医療のネットワークの構築」、「コミュニティの持続のための場と仕組みの構築」です。2つ目として「居住環境の再生に向けて」ということでは、「住まいを中心とした小学校区エリアでの支え合いの醸成」、「住まいとまちの環境の再生」、「民間事業者やNPOとの連携」、「居住者が参画する仕組みの構築」です。以上、10項目を施策の方向性を今回の報告書の中で示していこうという考えでございます。

また、「人口減少社会における住みやすい都市・地域」というイメージをまとめました。こコミュニティを持続可能なものにしていくために藤沢市として、どんな取組が必要かということを示していきたいと考えておりますので、報告書ができた段階でご覧になっていただければと思います。非常に雑駁なお話で申しわけありませんが、時間の関係で、私の報告を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

○司会

ありがとうございました。ここで第1部が終了となります。

○司会

それでは、第2部パネルディスカッションを始めたいと思います。「住み慣れた地域での居場所の果たす役割」について、さまざまな活動事例をご紹介いただきながら、皆様と考えていきたいと思います。

コーディネーターは、第1部でご講演をいただきました大江教授です。

また、パネリストは、睦自治会シニアクラブ水睦会会長の山野辺國雄様、片瀬地区社会福祉協議会会長の杉山義子様、藤沢市市民自治部市民自治推進課課長補佐の青木、同じく市民自治推進課主任の石田、第1部で調査研究報告をいたしました杉渕です。

○大江教授

第2部パネルディスカッション「住み慣れた地域での居場所の果たす役割」というテーマで、話し合いをしていきたいと思います。

本日は、地域で活動していらっしゃる山野邊さん、杉山さん、そして市民自治推進課で地域の縁側事業や自治会・町内会活動の支援に携わっている青木さん、石田さんから、今の藤沢市におけるコミュニティの実態と方向性についてお話をいただいて、それをもとに意見交換を進めていきたいと考えております。

それでは、早速、山野邊さんから活動のご紹介をお願いします。

○山野邊氏

睦自治会シニアクラブ水睦会は、現在、会員数70名、うち女性が27名、男性43名、平均年齢は76.5歳となっています。入会資格は、睦自治会会員に限らず、どこの自治会の方でもよく、自治会に属していなくもかまわないとしています。シニアクラブ水睦会は、昭和53年に結成されました睦自治会の老人クラブとして昭和61年に結成され、会員の親睦を目的として活動をしてきました。平成21年5月に19の方が入会しましたときに、親睦ではなく「人の輪」をつくっていかうのではないかということになり、人の輪の構築に軸足を移して活動することにいたしました。

活動の基本概念としては「人の輪、人のつながり」ということで、私たちが住んでいる睦自治会は東西に細く長いこともあり、東部の方と西部の方との交流が余りないこともありまして、顔を見知ったものをつくろうということでスタートしたわけです。水睦会の人たち、睦自治会の人たち、近隣自治会の人たち、できれば向こう三軒両隣りで、これから大事になる「見守り」ということも目的にしました。それから、日常生活の自助、共助、公助、防犯活動、防災活動、健康維持活動を人の輪を通じてやっていかうのではないかとということで、活動の基本を「人の輪」としたわけでありまして。

顔を合わせる機会をたくさんつくろうということで、趣味を基盤にした同好会を立ち上げました。活動を進める際には、「言いだしっぺ」の原則というのがあって、言い出した人がリーダーになって取組を進めるという方式をとっており、これは今も守っています。例

えば麻雀クラブをつくろうといったら、「あなたが言い出したんだから、あなたがやりなさい」と言って、場所の問題、人の問題等全部やってくださいというのが言い出しっぺの原則であります。

水睦会の行事には会員、自治会に関係なく参加は自由です。同好会については毎月定期的に実施しております。最近では「習字同好会」というものが昨年結成されました。それから、同好会が順調に立ち上がってきましたので、趣味によらない、何気ない出会い、その出会いによって会員の生活状況を把握するような取組、どうしているかな、大丈夫かなと、そういう情報もお互いに知ろうではないかという趣旨で「コミュニティカフェ」を立ち上げました。コミュニティカフェは8年前に「サロン水睦」として立ち上げて、毎月第4木曜日9時から4時まで開いております。それに引き続いて1年半後に女性専科の「なんでもやってみよう会」ができて、女性だけで気楽に集まれる会を毎月第1月曜日9時から4時までやっております。

また、春の日帰りバス旅行と秋の1泊バス旅行は、当初からずっと続いております。最近では三崎にマグロを食べに行く日帰り旅行と、館山寺温泉に1泊旅行をいたしました。

それから、私ども自治会には遠藤丸山公園がありますので、公園愛護会を結成して毎月掃除をしております。

役員会・月例会は毎月第2水曜日に開いております。それから「サロン水睦」では、メンバーがなかなか集まりにくいところがありましたので、異文化雑学講座というのを毎回開催しております。これは地域のお互いをよく知ろうということで、地域にお住まいの方を講師にして、順番に自分の体験あるいは自分の知っていることをテーマに講座を行っております。

健康寿命を延ばすための取組というのを特に意識してやっておりますが、慶應義塾大学と藤沢市の指導を受けてラジオ体操第一、第二に「ふじさわプラステン体操」を加えて、健康寿命を延ばす運動に取り組んでおります。特に慶應義塾大学の「運動と認知機能に関する研究」に、ラジオ体操メンバーが協力しております。おかげさまで直接的にいろいろご指導いただけるというメリットがあります。その他に、藤沢市の事業で、生涯学習出張講座「こんにちは！藤沢塾です」というものがありますので、そこから講師の方にお越しただいて、健康講座を開催しております。

最近、インターネットがなければ暮らしにくくなる感じになってきましたけれども、インターネットを身近に感じていただく、特に高齢者ですから、「えっ、パソコン」なんて言われる方がほとんどですので、「タブレットと遊ぼう」という講座を連続して開いておりますし、これからも開いていこうと思っております。気軽に遊んでいきますと、インターネットとかタブレットを意識しないで楽しんでいただけると感じております。これは「湘南ふじさわシニアネット」というNPOの団体をお願いして行っております。

それから、歴史の勉強も行っております。湘南古道探検隊というのをシニアクラブ水睦会発足と同時にスタートして、毎月ウォーキングをしております。また、「こんにちは！藤

沢塾」から専門家を招いて歴史講座をやっております。

私たちのやっていることの情報の発信として、外に知らせるというより、水睦会の中で情報を共有していこうということで、「水睦会たより」を毎月発行しております。できるだけ会員皆さんに執筆していただいて、それをまとめることをやっております。また、水睦会のホームページをつくりまして、今ではホームページが定着してきましたので、「水睦会たより」とか「水睦会回覧」は紙媒体ですが、インターネット環境のある会員には配らないので、ホームページを見てくださいということで、昨年の中ごろからそういうことになりました。それから、睦自治会自体にはホームページがありませんでしたので、睦自治会ホームページをつくり上げて、今、運営のお手伝いをしているところであります。

私たちが一番心配しているのは、「見守り活動」です。特に独居高齢者が増えてきて、現在、十数人おりますので、そういう方々の見守りをどうしていくかという意味で、自治会が月6回の防犯パトロールをしております。そのときに、独居高齢者の状況をソフトに見ていこうではないかということで、昨年の秋から見守り活動を開始しております。

「人の輪」というのを拡大していこうということで、近隣自治会との交流、私どもの自治会の近くには「やよい会」と「ささら自治会」という活動が活発な自治会があります。そこと交流を深めようということで、ゴルフと親睦を兼ねた食事会をやっております。

私たちシニアクラブ水睦会の中で一番効果のある集まり、いわゆる懇親会は随時開催で、その都度1,000円の会費で開いております。懇親会をやるぞということ、20~30人は集まってくるところであります。

シニアクラブ水睦会メンバーが主体となって、「睦自治会を考える会」というのをスタートさせました。会員のうち65歳が60%おりますが、そのパワーを使いながら自治会をよりよいものにしていくという考えから、睦自治会がどうあるべきかについて話し合っています。これからは、有志参加型の自治会を主流にしなければいけないということでもあります。

昨年の2月にロボットタクシーの実証実験がありまして、水睦会のメンバーが参加いたしました。それから、昨年の11月、12月にNTTドコモが提唱しましたICTを活用した健康管理システム実証実験、これがどういうことに我々が使えるだろうかということを経験するというので、実証実験に参加いたしました。それから今、打ち出されているソイリンクに対応して、水睦会の活動にどれだけ効果のあることができるのだろうかという効果の確認にも取り組もうと思いい、今現在、3人が登録しようと進めております。

○杉山氏

資料についてですが、ピンクの冊子「ひだまり片瀬」は、後ほどお読みいただきたいと思っております。こちらは、ボランティアセンター「ひだまり片瀬」が何をしているかということをお知らせしているものです。また、「かたせ・にこにこ広場」は、その年1年間の日程を書いて、皆様にお配りしているものです。それから、2つ折りのカラー冊子「ひだまり片瀬」は、他地域から見学に来られた方にお渡ししているパンフレットです。「ひだまり片

瀬」は毎年1回発行しております。皆さんにお配りするのにも間に合いませんでしたが、「みんなで作ろうひだまり片瀬」は、どういう方たちが参加しているのかをまとめたもので、完成したら配りしたいと思います。

なぜボランティアセンターをつくったかという、私が8年前に社協の会長を受けたときに、若いお母さんから「友達ができない」、といった話があり、みんなが毎日集まれる場所が欲しいという要望がありました。その当時、片瀬公民館で月1回「楽しく子育て 保育室で遊ぼう」を開催しておりましたが、1ヵ月に一度ですので、お母さんたちからそのときに行かれないと次の月になってしまうという相談がありました。そこで、何とかもう一回でもやってほしいということで公民館に行きましたら、会場がないので難しいという話になりました。そこで、社協の会長、民協の会長、青少協の会長、それから片瀬市民センター長に来ていただいて、いろいろ相談しました。そこで「しおさいセンター」のふれあいルームで月1回増やしたのですが、そうすると、ふれあいルームを全部使ってしまうので、「ふれあいルームは、いつでも、だれでも使える場所ではないのか、それを占領している」というご意見がありまして、これでは立ち行かなくなる、何とか場所をつくろうということで動きました。それで立ち上がったのが、「ボランティアセンター」で、2010年1月18日にオープンすることができました。そして5年前にボランティアセンターの愛称を募集するというので、ホームページに募集情報を出したら、北は北海道から南は鹿児島から50通の応募がありました。応募の愛称名についてはいろいろ書かれているのですが、片瀬において簡単に、これはこういう意味ですということも書けないということで、皆さんと相談して決定したのが「ひだまり片瀬」でした。「ひだまり片瀬」というのは、地域の福祉活動の拠点として、人と人とのつながりを大切に、支え合う地域社会の実現を図ることが目的で設置されました。高齢者から赤ちゃんまで、誰でもいつでも気軽に立ち寄れる居場所事業、片瀬の場合には居場所、遊ぶ場所だけではなくて、高齢者に対しては地域包括舘生園の相談者が担当していただきまして、毎週水曜日に相談を受けております。また、第2月曜日には、ボランティアでやっているのですが、成年後見の相談日、また、「にこにこ広場」のときには子育てなどの相談をしてくれる専門家がついております。ですから、私たち従事者は、「昔はこうだった」なんて姑根性を出さなくて済むのです。つなげていけばいいわけです。このため、自然と見守る人もおじいちゃん、おばあちゃん、おじさん、おばさんになりまして、全然圧力がないということで、利用する方は実家に帰ってきているという感じですので、入ってくるときに「ただいま」って言うお子さんもいて、最初、びっくりしたのですが、そのように受けとめてくれているのだと、皆さんが利用しやすい、楽しいスペースになっていることをすごく喜んでおります。

やはり親だけでなく、子ども自体が今の雰囲気をもっと好んでいて、一生懸命遊んでくれる、何かあると相談している、そういうような感じのスペースができました。そして、2年前に地域の縁側の交流スペースのモデル事業とことでスタートいたしました。今までの内容と違った講座も設けておりますし、自由に使ってもらっている、そういうことで

私たちは、これからも皆さんが気持ちよく気楽に来ていただけるスペースを目指して頑張っていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

○市民自治推進課青木

藤沢市の地域の縁側事業について、ご紹介をさせていただきます。

縁側事業の趣旨、目的、事業内容についてですが、近年、超高齢社会の進展や単身世帯の増加などによりまして、地域におけるコミュニティが希薄化するなど、地域のさまざまな課題への影響が懸念されております。そうした現状を踏まえて、住民同士のつながり、支え合いを大切にしながら人の和を広げ、誰もが生き生きと健やかに暮らせるまちづくりを目指すとともに、藤沢型の地域包括ケアシステムの構築に向けた取組の一環として、多様な地域住民が気軽に立ち寄り、また、地域の相談窓口としての機能などを備えた居場所を「地域の縁側」と位置づけまして、社会福祉協議会と協働しまして、実施団体に対しまして運営費などの補助とか相談機能に対する支援などを行っております。

簡単に言いますと、居場所というか、近所の人がおしゃべりをしたり、子どもたちの遊ぶ姿を見守ったり、お年寄りから子育て世代に知恵を伝えたり、世代を問わない地域の交流の場が地域の縁側事業になります。事業については、平成 26 年度にモデル事業がスタートして、本格的には 27 年度からスタートしたのになります。縁側事業につきましては、「基本型」「特定型」「基幹型」の 3 つの類型によりまして、事業を展開しております。

まず「基本型」は、ちょっとした困り事などに対応できる体制が整っており、必要な専門機関へのつながりなどの機能を有してございまして、世代を問わずに誰でも交流できる居場所となっており、現在まで 18 ヶ所開設されております。

2 つ目の「特定型」につきましては、平成 28 年度にスタートしてございまして、居場所を利用する対象世代は少し緩和してございまして、多世代ではないけれども、例えば子育て世代とか高齢者とか、世代を特定した利用者が自由に集え、そして相談機能などを必要としない居場所となっております。この特定型については、現在 5 ヶ所が開設されております。

3 つ目の「基幹型」につきましては、担当部署は福祉部になります。3 ヶ所開設されております。この 3 つの類型を合わせまして、26 ヶ所が開設されてございまして、どの居場所につきましても、利用は無料となっておりますので、ぜひ気軽にお立ち寄りいただければと思っております。

○市民自治推進課石田

自治会・町内会を担当しております。自治会・町内会は地縁を基盤とする住民にとって最も身近なコミュニティであり、住民一人ひとりが参加する意義及び楽しみを見だし、自助、共助、公助の各分野でそれぞれが持てる力を出し合い、自分たちが住む環境をより良い方向へと導いていくことを目的として自主的につくられた団体です。

しかしながら、近年におきましては、ライフスタイルの変化、ひとり暮らし世帯の増加、

住民の高齢化、役員の成り手不足などにより、全国的に自治会・町内会の加入率は低下傾向にあります。藤沢市におきましても、昭和 50 年代には 95%前後の数値を維持していた自治会・町内会の加入率が平成 27 年 9 月の時点では約 76%まで低下しており、近年では毎年約 1 ポイントずつの減少傾向がみられるといった状況です。

このような状況を踏まえた上で、市民自治推進課では市内に 478 ある自治会・町内会を、人と人のつながりを調整するためのパートナーであると認識し、自治会・町内会の自主性を尊重しながら、より魅力的で意義のある活動をしていくため、各地区の市民センター・公民館と連携しながら、自治会・町内会への支援について取り組んでいる次第でございます。

今年度行った新たな取り組みを幾つかご紹介したいと思います。1つ目は、「地域、自治会・町内会、ご近所アンケート調査」を実施いたしました。こちらは 20 歳以上の市民 3,000 名を無作為に抽出し、地域に関するアンケートを行い、自治会・町内会への加入、未加入を問わず、地域における課題の洗い出しというものを行いました。

もう 1 つは、「自治会・町内会ハンドブック」というものがあります。こちらの方は 10 年間、据え置かれていたのですけれども、今年度大幅なりニューアルをいたしました。先ほどの水睦会のお話にも「人の輪」という言葉がありましたが、こちらにおきましても表紙に「人の和」と書かれています。藤沢市においてもこういった言葉を大事に、自治会・町内会の支援について取り組んでいるところです。

○大江教授

本日は、山野邊さんと杉山さんという老人クラブがベースになってできたシニアクラブ水睦会と、地区社協の杉山さんということだったので、伝統的地域社会的な背景を持った活動かなと思っていたのですが、全然そうではなくて、さっきお話した地縁型、テーマ型で言うと、水睦会はほとんどテーマ型の活動で成り立っている。なおかつ入会資格を自治会員に限らず開かれていて、興味・関心のある人たちが集まってくる。と同時に、テーマだけでなく、ベースにあるお互いをちゃんと知ろうという形でコミュニティカフェをやっていたり、コミュニティカフェだけでやってもなかなか集まらないから、いろいろな講座をやってみたりというふうに、いろいろ工夫されてやっているということがわかりました。

また、片瀬の杉山さんの方もボランティアセンターという形で、特に子育ての人たちに対するいろいろな形の場所や機会の提供ということをやっているという事で、非常に広がりがあるって、藤沢市では、どちらかというと地縁型をベースとしたコミュニティというものが、もう既に広がりを持ってテーマ型の方に移行しているという感じを持ちました。そこで、そういう活動を広げてこられた中で、非常に苦労されている点とか、もう少し状況が変わってくると、もっとつながりを広げられるのではないかと感じている部分もあるかと思いますので、その辺について山野邊さん、杉山さんにもう少しお話を伺

いたいと思います。

○山野邊氏

先ほどシニアクラブ水睦会のメンバーは70名と申し上げましたが、睦自治会には65歳以上が60%、200人から300人ぐらいいるけれども、その方々がいるにもかかわらず70名の会員に留まっている。もちろん会員ではない方で、いろいろな行事に参加していただいている方もいるけれども、なかなか水睦会の会員以外で、活動に参加してくれる方いないので悩んでいます。これをどうしていけばいいのだろうかというのがポイントです。

もう1つは、何かこれからやるときに、インターネットを使うということが当たり前の世界になってきているということを考えてみますと、これから水睦会だけではなくて自治会の運営にも、あるいは湘南大庭という運営にもインターネットは欠かせないということになりますと、自由に使えるインターネット環境を何とかできないものだろうかと思っております。

○杉山氏

従事者のことが、一番の問題になりました。いろいろ意見はあっても午前、午後と2人ずつの体制で今現在行っておりますが、当時の片瀬市民センター長から社協で受けてほしいと言われて、社協の評議員全員にお手紙を出しながら、「ボランティアセンターができるのですが、お当番をしていただけますか」、「もしお当番していただけるなら、何曜日の午前、午後ですか」というようなことを、全員にアンケートをいたしました。それによって最初から従事者に対しての補充ができて、今現在はおかげさまで地域の方も従事者として勤めていただいております。「ひだまり片瀬」をするには、そこを見守る人が大事ということで、それに対しての苦労がありました。現在は81名の方がいらっしやいまして、その方たちが交代、交代についていただいております、皆さんが温かく迎えてくださっているおかげで、素晴らしい「ひだまり片瀬」になっていると思います。

○大江教授

今の杉山さんのお話は、苦労はあったけれども、今は解決されていると、どうしてそういうふうになっていったのですか。

○杉山氏

従事した方は、最初は「しょうがないからやるか」というのですけれども、地域のいろいろな方、お子さんからお年寄りの方とのふれあいを通して、このような活動が出来ているというのは、逆にお金を出してもいいねというような感じで、今現在になっております。

○大江教授

私が所属する慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスに加藤先生という方がいて、カレーキャラバンというのをやっておられます。いろいろなところに行ってカレーをつくって振舞うということをやっているのですが、費用は全部自分持ちです。普通、カレーを出せば料金をもらうわけですけども、全部自分でお金を出してカレーをつくって振舞っている。ある種、実験的なことなのでしょうけれども、そこにカレーを食べに来たお婆さんが、「あんな、いいことやっているね」と、すごくいい趣味だと言われたそうです。趣味としてやって、お金を使うわけですが、そういうお金を使うのも趣味として、本来ならお金を取ってやるのと逆にやるということで、新たなコミュニケーションが生まれてきたり、役割が生まれてきたりということがあるということに気がついたのですけれども、今の「お金を払ってもやってもいいわね」というのはそういう感じですよ。

一方、山野邊さんの方の困難な点と申しますか、水睦会が属している睦自治会の高齢者以外の人たちと、水睦会との間のつながりがちょっと薄いというお話と理解していいですか。

○山野邊氏

睦自治会に属している高齢者の方が、他に趣味があったりということもあるのでしょうけれども、数字の上で言いますと、水睦会に入っている方が70名、入っておられない高齢者が200人と思っただけであればいいと思います。あとの130人をどうすればいいのか、そのまま放っておいていいのか、何か私たちがもっと魅力あることをやる必要があるのかなという悩みです。

○大江教授

関心はありそうだが、まだ入っていない人がいそうだというふうに見ていらっしゃるということですか。

○山野邊氏

今おっしゃったようなところもだんだん見えてきましたので、少しその辺を開拓するというか、少しこちらから近づいてみようかと思っています。

○大江教授

今の杉山さんのお話がそういうときのヒントになりませんか。つまり何かの役割が生ずるような形の参加の仕方というものを促していく。自分の楽しみとか趣味とか健康というだけでなく、他のグループ外の人役に立つみたいな活動の方に少し行ってみるということでもよろしいですか。

○山野邊氏

おっしゃるとおり、多分今のやり方に魅力がないのだと思います。こっちをやりたいといったときに、こっちよりもあっちの方をやるということになると思うのです。そういう意味では、今お話のあった「ひだまり片瀬」のようなやり方を勉強させていただこうと思います。私どものところは冒頭に申し上げましたように、何かやろうとしたら、言いだしっぺがやるという原則をずっと貫いていますので、言いだしっぺにはなりたくないという方もおられるかもしれません。

○大江教授

ずっとつないでいくと、別の人の力を借りるのもいいかもしれません。私は東北のまちで老人クラブのことを勉強したときに、その老人クラブは、東北地方なので長い間序列があつて大変なところだったようです。そのまちで教育委員会のトップをやっていた方で、定年後、老人クラブに入れと言われたときに、そこに入ると、まず雑巾がけからやらされるので嫌だと思い、自分の好きなようにやらせてくれるなら入ってもいいという条件をつけて入ったわけです。それで何をしたかという、趣味でやっている蕎麦打ちのグループに入ったわけです。そこで自分たちで打った蕎麦を自分たちで食べておしまいではつまらないじゃないかということで、その青年部の人たちがいろいろやってくれるので、その蕎麦をそういう人たちに振舞おうということにしてやろうよと呼びかけたそうです。人に振舞うのだから、蕎麦打ちがうまくならなければいけないと、モチベーションを上げて、そして振舞う場面をつくり、その老人会の活動が他の世代の人たちとのつながりに展開していくというふうにやってみたら、よかったという話をされたことがあるのですが、そのときのつなぎ方も「言いだしっぺ」に当たるといってもいいかもしれません。

市の方から、今のお話を聞きながらでも、言い足りなかったというようなところがありますか。

○市民自治推進課青木

先ほどの地域の縁側事業の方で、今の課題といたしますか、今後の方向性についての補足ですけれども、平成27年度から事業を開始して、丸2年が経過しようとしているのですが、まだ全体で26カ所というところで、もっと増やしていきたいという部分があります。小学校区程度のエリアを単位として40カ所の設置を目指して取り組んでおります。それから今の制度で、例えば開設の時間とか補助金の額とか、その辺りが妥当なのかどうかについても実施団体のご意見等を伺いながら、今後も制度の検討を進めていきたいというところがあります。

それから居場所事業については、スタートをしてすぐ定着というのはなかなか難しいと思います。居場所が根づくといいますか、その地域に認知されるようにしていきたいところですが、実績としまして、平成27年度1カ所あたり、1日10人ぐらい集ってい

ただいています。平成 28 年度は大体 12 人ぐらいと、少しずつ増えている状況ではあるのですが、その辺りについては、ロコミというのは大きな手法というか、有効であるというようなことを実施団体の方がおっしゃっていましたので、その辺りも進めていながら、取り組んでいければと思っております。それから実施場所ですけれども、地域市民の家という公設の集会所みたいな施設ですけれども、利用率が低いという理由もあって、こういった居場所事業に市民の家をもっと活用していったらと考えておまして、現在は 4 ヶ所で市民の家を使って縁側事業をやっているけれども、今後も増やしていきたいという思いはあります。

○大江教授

山野邊さん、杉山さんはこの地域の縁側事業をどういうふうにとめていらっしゃるのでしょうか。

○山野邊氏

地域の縁側事業そのものは、いい事業だと思います。しかし、どこでやるかという場所について、例えば水睦会の場合は集会所を使っております。しかも、集会所は私たち以外使わないので、独占して使えます。けれども、例えば市民の家というものは独占的に使えないと思います。市民の家をもう少し使いやすくすることが、先ほど利用率が低いとおっしゃったけれども、その辺りの工夫も必要だろうと思います。今、湘南大庭で私が関係している「たきのさわパラダイス」という居場所がありますが、そこは関係者のご理解をいただいて、場所には苦勞しておりません。ただ次に、別の小学校区でやろうとしますと、そこの自治会の市民の家が常に使用できるかという課題はあります。また、空き家があれば使えるけれども、空き家はお金がかかるという話にもなりますので、その辺りが課題だと思います。

○杉山氏

「ひだまり片瀬」は月曜から金曜日まで毎日開いております。不思議なことに単純に計算しますと、1 日平均 14 人というのをずっと維持しています。特に子どもの「にこにこ広場」ですけれども、市長の顔が出ている冊子を見ていただくと、これは片瀬中学校の図書館でやっているのですが、子どもたちが昼休みに来てくださって、抱っこしている姿とかいろいろふれあいがあるのです。ボランティアセンターに来てくだされば、記録として残っておりますので、ぜひともその中学生と子どもたちの交流の雰囲気を見ていただきたいと思っております。片瀬市民の家とかあちこちで使っておりますので、よろしくお願ひします。

○大江教授

それでは、会場の方からご意見やご質問がありましたら、挙手をお願いします。

○来場者

私は老人会の年齢ですけれども、実際には地域の老人会には入っておりません。その暇がないというのが理由ですけれども、会長がよく嘆いているのは、なかなか新しい人が入ってこない、平均年齢はどんどん上がって行って、上の人は亡くなる一方で、新しい人は入ってこないというのですが、きょうの山野邊さんのお話で、老人会の枠を超えていろいろなことをやっているというのは、かなりヒントになるのではないかと考えていて、この情報はぜひ伝えたいと思います。

質問ですけれども、老人会というのは老人クラブ連合会とかいろいろなところに所属していて、そのためのいろいろな作業をしている。同時に助成金を老人会はもらっているけれども、先ほどの親睦会の場合は老人会ですか、それとの関連をお話いただきたいと思います。

○山野邊氏

老人クラブということですので、湘南大庭地区老人クラブ連合会、藤沢市老人クラブ連合会に所属しています。行政からの助成金も受けております。ただ、新しい老人クラブをつくりたいというときに、老人クラブをつくと藤沢市老人クラブ連合会に属して、何かあると引っ張り出されるということがあったり、分担金も必要だがそういうお金はないということがあります。私たちの湘南大庭地区老人クラブ連合会の会合では、そのようなことが話題になっています。

○大江教授

ほかにはいかがでしょうか。

それでは、生駒市から遠いところをご出席されておりますので、生駒市での研究等を比較して、ご感想等がありましたら、お願いいたします。

○生駒市職員

奈良県生駒市から参りました。先日、生駒市でもシンポジウムをりましたが、生駒市は空き家を地域の活性化にどう活用していけるかというテーマでやりました。空き家を使うのは、お金の問題、制度の問題とさまざまな問題がありまして、すぐにはうまくいかない案件で、完全な結論は出せなかったのですが、これから行政も含め業者とか各団体の方々と協力し合いながら、意見を出し合いながら、地域活性化に向けて空き家を使っていけるかというシンポジウムをやりました。

本日のお話を聞いていて、非常に活発で人のパワーを感じるように思いました。関東と

関西と違いますけれども、今後、いろいろな方のパワー、皆さんの元気をいただきながら、行政も一緒になってやっていきたいと思います。

○大江教授

どうもありがとうございました。確かに空き家問題はいろいろなところで出てまいりま
すし、私も某市で空き家対策協議会の会長をやっているのですが、藤沢市の場合には、先
ほどおっしゃったように、いろいろな形で活動場所がこれまでつくられてきていて、むし
ろそれを上手に使っていく、結び目ができちゃっているものを解きほぐしたり、溶かしな
がら使い方を考えていくと、活動場所についてはかなりの部分が領域にあるという印象を
持っております。杉渕さん、お聞きになっていて何かありますか。

○企画政策課杉渕

本日は、パネリストの皆様、ありがとうございました。最初の大江先生のお話の中の受
け手が担い手になるというケースは、藤沢市の場合もこれからは大事なのではないかと思
っております。互いに支え合うことが居場所の問題、コミュニティの問題で非常に重要で
す。湘南大庭地区や片瀬地区でやられている方々が自然とそういう形をつくっていらっし
やるのではないかと考えております。それから居場所の問題も湘南大庭地区でもいろい
ろなケースがありまして、商業施設を借りていたり、学校の空き教室を使っていたり、地域
市民の家、それから町内会館とさまざまなケースがあります。そういったことが藤沢市の
活動が多面的に、多様に行われている特徴かと思っておりますので、これまでに蓄えられ
た地域資源というものをどのように活かしていくかというのがコミュニティの活性化にと
って重要なことかと思えます。

それから山野邊さんが言われた、どうしても家にいがちな人とか、こういう活動を見
ながら活動に加われない人をどうやって参画させるか、それが今回の調査のテーマでもあ
りましたので、いろいろな形で今回からヒントをいただいたと思っております。行政の施
策の方にも調査をした結果を活かしていきたいと思っておりますので、皆さん、本当にあ
りありがとうございました。

○大江教授

最後に、何かありますか。

○杉山氏

最後に、これからのことでお話しますと、実は写真にあるのはお年寄りがちょっと寄っ
てハーモニカを子どもたちに聞かせているもので、これは大変好評です。それからその下
の裁縫をやっているときに、子どもがどの色のビーズにしようかと一緒にやっています。
こういう交流はできるけれども、昨年、うれしいことに10月19日に「コミュニティハウ

ス片瀬山」がオープンされました。これは空き家を活用したものです。きょうは関係者も来ていらっしゃるのですが、先ほど杉渕さんがおっしゃった「コミュニティハウス片瀬山」が出ておりますが、そこの連携でこれからは「ひだまり片瀬」では、将棋はできません。子どもはガチャガチャしたものだ、喜んでかき回しますので、今までは我慢して「帰るよ」と言って帰っていたのですが、これからは「コミュニティハウス片瀬山」といろいろな意味で素晴らしい交流ができるのではないかと考えています。また、地域の方たちが利用できるスペースができたことをご報告いたします。

○山野邊氏

先ほどご指摘の問題点をどうやって解決していくのか、これが今後やることだと思っています。私たちの年代が中心となって活動を進めていますが、私自身、毎年年を取っています。しかし、今後をどうしていくかということについては、今は考えないでやろうと思っています。

○大江教授

いい活動があるといっても、同じ仕組みでやっても、いろいろな活動がある中では情報交換というのはなかなかうまくいかないもので、そういうときに中間支援の機能があるという話が出てきてます。そういうことは藤沢市でもやっているけれども、その仕組みをうまく他にも移して、他でもやれるようにという情報の交流をやっていくといいのではないかと思います。それからインターネットを自由に使える環境、サーバを藤沢市に置くとか、インターネット環境をどういうふうにつくっていくか、個別に自治会・町内会でどこかと契約してやるということではなくて、そういう基盤をコミュニティ基盤、コミュニティインフラとしてつくっていくということも必要かもしれないということをお話を伺いながら思いました。

本日は非常に豊かなお話を伺えて、私も大変勉強になりましたし、これからの皆様の活動がますます持続的なものになっていって、タイトルにあります「持続可能なコミュニティ」というものに結びついていけばいいと思っています。次の世代にどういうふうにつながっていくかは、大変大きなテーマだと思いますが、それにチャレンジしていただきたいし、微力ながらそれにお手伝いできればと思っています。

本日は、長時間、ご協力いただきましてありがとうございます。これにてミニシンポジウムを終わります。

○司会

ご登壇いただきました皆様、ありがとうございます。実際に地域活動に携わっていらっしゃる方々から貴重なお話をいただいたと思います。改めてご登壇の皆様には拍手をお願いいたします。

以上をもちまして、藤沢市ミニシンポジウム「住宅都市地域における持続可能なコミュニティのあり方の調査研究」報告会を閉会といたします。

以 上